はっとしたこと

菅田　忠志

「アッ　危ない！」。周りの大人達がちょっと目を離し、1，2m 離れた一瞬のことだった。

孫の「のぞみ」がおとなの食卓に並んで食べさせろとせがみ始めた頃、市販の材木を買ってきて、食卓の高さに合ういすを作ってやった。

座る部分はちょうどマス席のようにし、すっぽりお尻から入る大きさに決めたが、4本の足は間隔の狭い割には、どうしても足長の格好にならざるをえなかった。

そのままではいかにも不安定なので、足底部分に井げた状にスキーのそりのような板を打ちつけて、前後左右からの力にもほぼ危険の無い安定したいすができあがった。

食卓の高さに合わせた小さなテーブルには、かわいいキャラクターのシールを張り、主賓の訪問を待

った。

数日後、やってきた孫に夕食の席でその椅子をプレゼントし座らせた。少し会わないうちに思っていたよりお尻も大きくなっており、もう少し大きくしておくべきだったことを後悔しながらも、「まあ今はピッタリだから」と自己満足。

安定も良さそうだ。少々ゆすっても倒れることもなさそうだ。孫も前に貼ったキャラクターにご機嫌な様子。やれやれと周りのおとなたちが食器を運んだり、並べたりしだしたとき、思いもかけなかったことに、その席で立ちはじめた。

「危ない！」と駆け寄るが間に合わず、後向きに頭から落っこちてしまった。

「しまった！」「どうしよう！」。大人達はうろたえた。

しかし、のぞみはよほどビックリしたらしく、すぐに大声で泣きはじめていた。

その声を聞いてなぜかほっとした。多分泣かない

方が危険、とのあやふやな知識が働いたのだろう。
母親が抱き起こし、あやしながら寝かせた。

2，3日、いや半年くらいは常に「異常な様子」がでないか心配したが、幸い何事も無かったようで、3年半になるが、この春からは近所の幼稚園に通い、新しい友達ができたと話してくれた。

これからも、危険がいっぱいの世の荒波にもまれながら大きくなるのだろうが、運の強さも味方にしながら、健やかに成長してくれることを見守っていてやろう。「のんちゃん　がんばれ！」

今は、あのときのいすは物置で、縫いぐるみが腰掛けている。